

会 告

平成七年度史学研究會大会および総会は、予定通り、十一月二日（木）午後一時より京大会館において開催されました。

公開講演は小谷仲男、朝尾直弘の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終わりました。

ガンダーラ美術に関する最近の
発掘成果

小谷 仲男氏

一上級武士の十七世紀

朝尾直弘氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成七年度会務報告がなされました。

平成七年度

史学研究會大会講演要旨

ガンダーラ美術に関する

最近の発掘成果

——カニシユカ紀元八五年

カロシユティ刻文——

小 谷 仲 男

私は一九八四、八六、八九年の三シーズンにわたって、パキスタン北部でガンダーラ仏教寺院址ラーニガートの発掘調査に従事した。ラーニガート(Ranigat)とは、現地名で「女王の岩」を意味し、遺跡の存在する山の尾根に大きな自然の立石がそびえていることに由来する。日本には神が天から降りてくる岩倉つまり神座の信仰があるが、もともとそのような神聖視された土地に仏教寺院が建立されたのではないかとおもわれる。西暦四〇一年に中国の巡礼僧、智嚴がガンダーラを訪れ、摩天陀羅精舎という寺院で三年間習禪の修行をしているが、『出三蔵記集』、『梁高僧伝』、ラーニガートがその寺院であったかも知れない。今回紹介するのは、私たちがラーニガート遺

---77257341478 75ε77577207589 (1)

---2v 1x 33337775ε77--- (2)



(1) ヴァースデーヴァ王名刻文（1984年出土）

(2) 85年刻文（1993年出土）

跡から発掘した二片のカロシユティ刻文である。

一、八五年刻文 このカロシユティ刻文の存在は一九九三年の追加調査のさいにはじめて確認されたもので、発掘調査報告書『ラニガートガンダーラ仏教遺跡の総合調査―第二冊図版編（京都大学学術出版会一九九四年）に間に合わなかった。長さ三〇cm、高さ一〇cm程度の角形石材である。文字が残存する平滑面は現状で高さ六cm、幅二四cm（挿図参照）。文章の始まりに当たる石材右部分が大きく破損し、左端は完存している。しかし刻文は別石に続く可能性はある。……*dhikhe sansare* 20 20 20 4 1 *maha*……と判読する。最初の二字……*dhikhe* は粗い字体で記され、自信のある判読ではない。この *sansare* は年を意味する *santvatsare* に相当するものとして解釈した。85という数字はカニシユカ紀元の八五年に違いなく、カニシユカ王の即位元年を西暦一四四年として計算すれば、二二八年にあたる。ヴァースデーヴァ王治世（A. D. 203-241）の二六年目である。以上の解読に誤りがなければ、これがラーニガート遺跡で発見された唯一の貴重な紀

年刻文となる。

この八五年刻文は石材の形式、刻文のスタイルから判断して、一九八四年出土のヴァースデーヴァ王名を刻文する框石（『図版編』Pl. 193^a）、および一九八六年出土の刻文框石（『図版編』Pl. 193^b）と類似し、みな連続する一組の刻文石であった可能性がある。

二、一九八四年出土ヴァースデーヴァ王刻文 主塔（St. 101）の南側で表面採集されたものである。緑泥片岩（Schist）の一種とおもえるが、やや赤みをおびた粗い石質である。高さ一〇cm、残存幅五三cm、奥行一四cmの石材で、一面を磨き、カロシユティ文字を一行に刻する。右端に刻文の始まりが存在し、左端二五字目で石が切断されている。刻文は力強く、明確にかかれるが、書体はやや走行体（cursive form）の傾向をもつ。次のように解読した。

vasudeva maharaja devaputrasya
agrabhaga parihamsadaha bhava[tu]
（ヴァースデーヴァ大王天子に至福
が与えられんことを）

vasudeva と読んだ最初の文字は *va* と読むよりは、*ra* あるいは *ba* の字形に近

いが、その次にくる称号からクシャン王ヴァースデーヴァの名にちがいない。ヴァースデーヴァ王貨幣にはギリシア文字で *βασιλευς* と記すので、*basileus* と綴ったのかもしれない。カロシユティ刻文にヴァースデーヴァの王名が知られるのはこれがはじめてである。

以上のような復元作業に、さらにラーニガート遺跡の発掘から得られた観察を加えて推論を続けてみよう。ラーニガート寺院はヴァースデーヴァ治世中あるいはその少し以前に、その講堂（R. 321）や中央街路（Street）に痕跡をとどめるような大火災にみまわれ、大きな損害を受けた。復旧作業として東地区 St. 101 の南側の谷間を埋め立て、その平地に St. 151, St. 152 などの小仏塔を建造し、ヴァースデーヴァ国王の至福を願う一連のカロシユティ刻文石をはめこんだ。東地区主塔 St. 101 も増広され、回廊は新たに敷石がしかれた。その敷石表面にヴァースデーヴァ貨幣多数を嵌入し、奉納した。ラーニガート寺院の復旧工事がほぼ完成したのがカニシユカ紀元八五年（A. D. 228）ころであった。中国側の記録『三國志』卷三（魏書、明帝紀）太和三年十二

月癸卯（西暦二三〇年一月二五日）の条には、「大月氏王波調遣使奉獻。以調為親魏大月氏王。（クシャン國王のヴァースデーヴァ [Vasudeva 波調] が使者を派遣し、貢物を献上したので、ヴァースデーヴァを親魏大月王に任じた）」と記されていた。ラーニガート刻文の西暦二二八年はちょうど中国への使者が発するか、その直前の年であるのは興味深い。使者の中国派遣とラーニガート寺院の復旧とは直接に結びつくものではないが、不明なクシャン王朝の歴史の一コマを垣間見るおもしろいとする。

一 上級武士の十七世紀

朝 尾 直 弘

日本の十七世紀は、戦国から平和への転換が進行した時代であった。これ以後、「天下泰平」の時代に入る。しかし、この時代のとらえ方はまだ古い枠組みから抜け出していない。いろいろな側面から再考する必要があるが、ここでは一人の上級武士の生活を検討することを通じて、従来の一面的・類型的な武士の性格や役割を考え直してみたい。

生駒利勝は、織田信長の側室として唯一織田家の血筋を伝えた女性を生んだ家柄の嫡流で、尾張徳川家に仕え、継嗣の御傳役として三千石を知行した武士である。その意味では特殊かもしれないが、本領を安堵され、その分独自の収入があった。問題は、この収入をいかに運用したかであり、在国中は自領や周辺村落に夫銀を貸し付け、中間などの傭い賃を捻出していた。利率は年利一五％程度で春に貸し秋に取り立てていた。一方、江戸参動中には、寛文十一年（一六七一）からの貸金の記録が残されている。貸し付けの対象は、尾張家世子の屋敷のあった麴町筋を中心とした下町の町人地の商人たちであり、家賃を取り、貸金は年利一二％で順調に回転している。家賃の史料としても古いものであるが、注目されるのは、これが明暦大火後の江戸復興に役立ったとみられる点である。大名・旗本の屋敷が集中する地区に、日常の生活用品を供給する商人の存在は不可欠であった。

利勝は元金を具足櫃に貯えていた。具足櫃の金はいうまでもなく戦国武士にとって命よりも大事な金である。その金が町人に対し、おそらくはその規模からみて営業活

動に投資されていたことは疑いない。もともと、当時もっとも資金を蓄積していたのは武家であったと考えられる。町人の大名貸ならぬ、武家の町人貸が初期の江戸の街づくりにはたした意義は想像以上に大きかったのではなからうか。武士の経済活動をもっと見なおす必要がある。